様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２００４６
研究課題名（和文）　西山宗因を中心とした連歌師の行動様式と武家文化の相関性に関わる研究

研究課題名（英文）　A Study of Related to Correlativity of Linked Verse Poet's Behavior Pattern and Samurai Culture：From the Perspective of Nishiyama Soin

研究代表者
尾崎　千佳　（OZAKI　CHIKA）
山口大学　・人文学部　・准教授
研究者番号：５０３３５７５９

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、武家文化との相関性から評価する新視点に即して西山宗因の伝記を総合化し、広く連歌師の行動様式として体系化することを目標として、連歌懐紙や紀行作品を調査・収集し、分析を加えた。その結果、宗因が、終生、主家加藤家の影響を受けた大名文化圏の中で行動した事実が明らかになった。改易・転封・家督継承等の事件や行事に際し、宗因は『源氏物語』等の古典テキストを引用駆使した連歌や紀行作品を草して献上することで、武家を慰撫・督励し、当該集団の精神的紐帯の役割を果たしていたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research topic, it aimed making the biography of Nishiyama Soin integrated in conformity with the new aspect evaluated from the correlativity with the samurai culture, and systematizing it widely as linked verse poet's behavior pattern, it investigated, the linked verse paper and the account of a trip work were collected, and the analysis was added. As a result, it was clarified that Soin acted in the feudal lord cultural area where the influence of his master's Kato family was received at all his life. At events of the attainder, the transfer, and the family estate succession, it is thought that Soin pacified and encouraged the samurai by writing the linked veres and the account of a trip work that quotes the classics text of The Tale of Genji etc. and presenting it, and played the role of a mental relation of the group.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	500,000	0	500,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	240,000	1,540,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：連歌、連歌師、西山宗因

１．研究開始当初の背景

(1) 近世初期に活躍した連歌師･俳諧師西山宗因については、戦後、頴原退蔵・野間光辰等による基礎的研究が行われてきたが、研究代表者もその驥尾に付し、「西山宗因年譜稿」（『ビブリア』第 111 号、平成 11 年）を発表し、『西山宗因全集』全６巻（平成 16 年―、八木書店）の編纂刊行に携わってきた。さらに、平成 18 年―20 年にかけて、『西山宗因全集』との連動企画として「宗因から芭

蕉へ」展を全国３ヵ所で開催するに当たり、その構想から深く関与し、記念講演会の講師も務めた。
(2) 叙上の業績の蓄積を経て、連歌師宗因を武家文化との相関性において再評価すべきであるとの視点を獲得した。宗因を談林俳諧の総帥として評価する従来の研究の多くは、彼が、武家社会のなかから育って学芸基盤を確立させ、諸侯の文化形成に多大な影響を及ぼしたという重要事実を、ほとんど等閑視してきたといってよい。連歌師宗因の行動様式は、戦国武将の間を渡り歩いた連歌師のそれとまさに等しく、自筆資料に乏しい中世連歌師の行動様式の欠を埋めるうえにおいても、西山宗因と武家文化という命題は、すこぶる有益な視座をもたらすことが期待された。
(3) 織豊から徳川へ政権の推移する時代相に即すとき、近世初期の文壇が構築された要因は、文芸の担い手の文芸活動を追うばかりでは十分には解明され得ず、そのパトロンたる諸侯側の論理からも探られる必要があると思われるが、先行研究は、多く、文芸者個人の伝記的事実の解明に集中し、大名の文事をとりあげる場合は概説に流れるきらいがあった。文芸生成の場やその営みの意味あいをより具体的に明らめるには、一人の文芸者の行動に視点を固定し、諸侯の庇護を獲得するその論理を追究する研究が望まれるところであった。

２．研究の目的
(1) 宗因評点の連歌資料のうち、作者が武家階層のものを抽出し、その評点様式や内容について分析することで、近世初期の武家における連歌興行の意義を解明する。
(2) 宗因の紀行文６編を考察の対象とし、各作品の修辞や典拠に留意しつつその主題を深く読み込むことで、紀行文の背景にある諸侯と宗因の関係性を明らかにする。
(3) 大名文化圏と連歌師宗因の関係性について、奥州磐城平の内藤家、九州小倉の小笠原家、播州明石の松平家など、連歌師宗因が獲得した広範な庇護者間を繋ぐ論理構造を究明する。

３．研究の方法
(1) 『西山宗因全集』第４巻所収の宗因評点巻から、武家階層の作品を抽出し、個別に分析を加える。興行年次と評点時期の明確な柿衞文庫『得能通広連歌集』の作者層や評点内容につき、特に詳しく検証する。
(2) 『西山宗因全集』第４巻所収の『肥後道記』『津山紀行』『奥州塩竈記』『筑紫太宰府記』『明石山庄記』『高野山詣記』について、諸本校合や出典調査を行い、その主題と献上主について検証する。
(3) 岩城平藩主内藤家・小倉藩主小笠原家・明石藩主松平家と宗因の関係を、上記紀行文や連歌懐紙に就きながら検証する。

４．研究成果
(1) 研究の主な成果としてまず特筆されるのは、宗因紀行文の嚆矢『肥後道記』につき、従来の理解を大きく改めることができた点である。
『肥後道記』は、寛永九年の加藤家改易により牢人した宗因が、翌十年秋、肥後を出て京都にたどり着くまでの船旅の記である。本作は、小宮豊隆・野間光辰によってもっぱら宗因の伝記研究に活用されてきたが、近年、文学作品としてこれを扱うべく、石川真弘によって『土佐日記』の影響が指摘されていた。
本研究では、まず、『肥後道記』の諸本を調査し、高知県佐川町立青山文庫本・天理図書館綿屋文庫本・財団法人水府明徳会彰考館文庫本・松宇文庫本・大阪府立大学山崎文庫本・熊本県立図書館上妻文庫本の６本の書誌・本文を収集した。本文の詳細な比較によって、上記６本が、宗因自筆本たる青山文庫本系統と、綿屋文庫本系統の２系統に分けられるという結果を得、その系統の異なりは、作者宗因自身の書き分けに基づくことを明らかにした。

宗因自筆『肥後道記』（青山文庫蔵）

さらに、『肥後道記』が、『土佐日記』のみならず、『源氏物語』『伊勢物語』『平家物語』等の古典をふんだんに引用している点に着目し、その引用の意味について考察した。先学の指摘する『土佐日記』との類似は、船旅の記である本作にとっては単なる趣向以上の意味は持たず、むしろ、『源氏物語』の頻繁な引用の方にこそ、重要な問題が含まれると考えられる。『肥後道記』には、須磨・明石巻から引用された源氏語が横溢しているが、それは、改易退転の悲劇に遭遇した主君加藤正方を光源氏の須磨流謫の姿と重ねあわせることによって、罪無くして流される者の悲哀を述べ、再起への祈願をこめるという主題を担った引用であった。
『肥後道記』は、何をおいてもまず、加藤正方に読まれ、その傷ついた魂を慰撫する目的で書かれた作品である。諸本のうち、綿屋文庫本系統は加藤正方献上本に基づく本文であり、青山文庫本系統は加藤家旧臣にもた

らされた本文であると推測され、加藤家の縁に連なる者の間で秘かに享受されてきた作品であったのである。

以上の分析結果につき、日本近世文学会において口頭発表を行い、査読審査を経て、同学会誌に掲載された。諸本や典拠の精査という常道的な分析を徹底することによって、従来、伝記研究に資する部分のみが断片的に知られてきた『肥後道記』を文学史上に定位することができたと言える。また、連歌師の紀行文が、いかなる目的で書かれ、いかに流布するものであるかという問題についても、ひとつの視点を示したと考える。

(2) 『肥後道記』で得た結果をふまえつつ、『奥州塩竈記』についても先と同様の諸本調査・分析を実施した。『奥州塩竈記』は、寛文二年から三年にかかる宗因の松島・塩竈下向記であり、その本格的な研究はこれまでほとんど存在しなかった。

個人蔵本・福岡市東長寺本・本間家本・学習院大学本の４本を調査した結果、いずれも宗因自筆にかかる巻子本でありながら、諸本間に著しい本文異同を有する事実が判明した。

作品世界は、諸本いずれも『伊勢物語』に大きく依拠しつつ、「昔男」ならぬ「今の翁」が東下りをし、「昔男」の追体験をするという主題で貫かれている。しかしながら、諸本は、巻末の娘追悼連歌百韻の有無によって大きく２系統に分けられ、かつ、追悼百韻所有系統本文（個人蔵本・学習院本）の末尾が述懐・懐旧のモチーフで締め括られるのに対し、追悼百韻を持たない系統の本文（東長寺本・本間家本）では江戸城下の新春に対する寿ぎで終わっているのである。前者は、かつて見た塩竈の栄華も潰え、現実のなかにひとり取り残される「昔男」の姿の投影であり、後者は、惟喬親王と「昔男」との交感の場面を下敷きにしながら正月を祝して「今の翁」の物語を閉じる。『奥州塩竈記』は、両系統とも『伊勢物語』に主題を借りながら、その結末において、追悼と祝儀という正反対のモチーフを提示しているのである。

追悼百韻を持たない伝本は、いずれも、巻末に「或人」の求めに応じて書写した旨の奥書を有し、その書写された年次の前後の状況に照らせば、小倉藩主小笠原忠真および明石藩主松平信之への献上本である可能性が高い。かつ、それらがかなり大ぶりの巻子本であることも考慮に入れるなら、大名家の床飾りとして備えるべく染筆・制作されたものと考えてよかろう。宗因は、大名からの所望に応じて『奥州塩竈記』を染筆するにあたり、末尾の追悼のモチーフを、あえて祝儀のモチーフに変更したのではなかったか。『奥州塩竈記』の諸本異同をめぐる問題は、連歌師の紀行文の生成と展開を考えるうえで、きわめて重要な示唆を含んでいると言える。

以上の分析にはいまだ推測の域を出ない点が多々あり、研究期間中に発表するには至らなかったが、近年中に口頭発表し、論文を公表する予定である。連歌師宗因の紀行文は、単なる旅の記録ではなく、あくまでも文学作品としての主題を備えている。しかも、その主題は、献上主たる大名との関係性を軸として構えられたものであった。この視点は、広く紀行文全体にも及ぼすべき課題であろう。

(3) 宗因と小笠原忠真との関係について検証する過程で、行橋市の個人が所有する連歌・俳諧資料のなかから、宗因自筆の連歌懐紙を発見した。寛文四年九月十三日の端作を持つ当該連歌懐紙は、これまでまったく知られていなかった新出資料である。

新出・宗因筆夢想連歌懐紙（個人蔵）

『忠真公年譜』によれば、大坂天満宮連歌所の宗匠を務めていた宗因は、当時、小笠原忠真の七十賀を祝すべく豊前小倉に滞在中であったから、本連歌も小倉城下で興行された一巻であったことは疑いがない。注目されるのは、本百韻の連衆が、西一鴎とその一党を中心に構成されていることである。西氏は、本姓阿蘇氏、肥後国八代郡山家城主の子孫と伝えられ、一鴎も慶長八年に八代に生まれ、長じて上洛し岡本玄冶に入門、学頭となって大坂に居を占めていたが、その医名を聞きつけた肥後藩主加藤忠広によって召し抱えられている。加藤家改易後も八代に留まって細川忠興に仕えたらしいが、正保元年、小笠原忠真の懇請を受けて、一家を挙げて小倉に移った。その背景には、小笠原忠真の妹が細川忠利に嫁したことによる、大名家同士の姻戚関係があったという。

宗因も一鴎も、もと加藤家に仕えた間柄であることから、加藤家没落から三十年を経て催された本百韻を「再会の一座」と仮に名づけ、学術誌に紹介した。本連歌懐紙の出現によって、宗因が、連歌師として成功した後も、依然として加藤家旧臣たちとの繋がりを保っていた事実がうかびあがった。また、小笠原忠真による連歌師宗因登用の背景に、加藤家の傘下にあった文化人を庇護する意識の存していた可能性を指摘し得た。

(4) 以上の資料収集・分析によって得られた視点を生かしつつ、宗因の生涯の履歴を「宗因年譜考証」にまとめた。旧稿「西山宗因年譜稿」では機械的な処理も多かったが、個々

の作品の読み込みを深めた結果、成立年次や場の推定に大きな進展があった。

連歌師宗因の活動は、十五歳から側近として仕えた主君加藤正方との関係性の中で育まれ、展開した。正方は、加藤忠広政権下における最大の政治的実力者でありながら、若くして里村北家に就いて連歌を学び、その腕前は文台開きを許されるほどであったらしい。宗因の連歌修学が、正方の連歌愛好の影響下に行われたことは疑いを容れない。

(1)に述べた寛永九年の加藤家退転後も、宗因は、青年時代の大半を正方と共に過ごしている。慶安元年には、すでに大坂天満宮連歌所の宗匠職にありながら、半年以上、正方配流先の広島に滞在し、正方の死を看取っている。宗因・正方両吟連歌には、言の葉の道を介した君臣の契り、罪なくして没落した身の悲哀といったモチーフがくり返し詠み込まれ、他にはない濃密な詩情を漂わせている。

正方没後、宗因は、大坂天満宮連歌所宗匠として本格的な活動を始動するが、その活動の基底には加藤家時代に培われた人間関係があったと思しい。承応二年七月、宗因は美作国津山を訪れて『津山紀行』一巻を草しているが、この旅の真の目的は、津山藩森家に仕えていた加藤家旧臣との再会にあったと推測される。宗因のこの動きは、同年閏六月、太守加藤忠広が流刑地出羽国荘内で没していることと無関係ではないだろう。(3)に詳述したように、寛文四年九月には、小倉の小笠原家の傘下にあった加藤家旧臣との再会も果たしている。加藤家旧臣のネットワークは、終生失われなかったものと見える。

(2)に述べたように、宗因は、寛文二年七月、奥州の地を踏み『奥州塩竈記』を著している。これは岩城平藩主内藤忠興の招聘による下向であった。内藤忠興には、寛永九年六月、父政長とともに城受け取りの上使として肥後に派遣された経歴があり、城明け渡しに奔走した加藤正方の側近であった宗因とも、熊本もしくは八代で、なにがしかの接触を持った可能性がある。忠興嫡男の内藤義概もまた、延宝三年四月、内藤家の江戸屋敷に宗因を呼び寄せ、数多の俳席に遊んだ。のみならず、義概の正室の実家に当たる明石藩主松平家当主の信之にも、宗因の登用を勧めるところがあったらしい。寛文十一年末頃から、宗因は信之の招きを受けてしばしば明石に下り、信之が大和郡山藩主に転じた延宝七年九月以降は、郡山と京坂の間を頻繁に行き来している。連歌師宗因の活動が、あくまで大名同士の人的関係に支えられていたことをうかがわせる。

(5) 以上の研究成果によって、宗因が、加藤家時代に培われたさまざまな資源を活用しつつ、大名家間の繋がりに支えられながら、連歌師としての活躍の場を獲得していった様相を具体的に明らかにし得たと考える。特定の武家との深い関係性において活動する連歌師の行動様式は、集団性を基本原理とする連歌という文芸の本質に起因しよう。改易・転封・家督継承等の事件や行事に際した連歌は、武家を時に慰撫し、時に督励し、集団の結束を高めるに裨益したと想像される。連歌が、個と個を繋ぐ文芸であったことに注意するなら、今後は、短冊・色紙・懐紙といった資料の特性にも留意を払いつつ、作品の分析を進める必要があると考える。

新出連歌懐紙の発見に恵まれたこともあり、研究目的の(1)に掲げていた評点資料の分析においては成果をあげ得なかった。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 尾崎千佳、『肥後道記』の典拠と主題、近世文藝、第 88 号、1-16 頁、2008 年、査読有
② 尾崎千佳、再会の一座―新出の宗因筆連歌懐紙をめぐって、鯉城往来、第 10 号、1-16 頁、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計２件）
① 尾崎千佳、『新撰菟玖波集』成立の一背景―大内政弘とその周辺、2009 年度芸備地方史研究会大会、2009 年７月５日、県立広島大学
② 尾崎千佳、『肥後道記』の典拠と主題、平成 19 年度日本近世文学会秋季大会、2007 年 11 月 10 日、佐賀大学

〔図書〕（計１件）
① 島津忠夫・石川真弘・尾崎千佳、八木書店、西山宗因全集第５巻伝記・研究篇、2010 年８月刊行予定、宗因年譜考証 300-450 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）
〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1) 研究代表者
尾崎　千佳（OZAKI　CHIKA）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：５０３３５７５９
(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし